

学位論文内容の要旨

学位申請者	岡村（城倉）郁子 【比較社会文化学専攻 平成19年度生】	要 旨
論文題目	帰国生の異文化体験の活用に対する意識と その関連要因 ―受入れ形態に着目して―	<p>本研究は、帰国生教育が「活用期」というべき新たな局面を迎えた現状に鑑み、帰国中学生および高校生が、異文化体験を通してどのような特性を得たのか、また、その特性を活用することについてどのような意識を持っているのかを実証的に検討した。第1章から第3章までは日本人海外駐在員を取り巻く環境の変化、文化移動をする子どもたちの海外での教育、地域や年代による変化、帰国した子どもたちの日本の学校文化への受入など歴史的な動向を詳説した。第4章から第5章では帰国生教育研究を概観し、分析枠組としてコミュニティ心理学、発達心理学に関する理論について述べた。第6章では帰国生が異文化体験を通して得たと認識する特性およびそれらの特性を活用することについての帰国生の意識を、帰国生自身への質問紙調査に基づき実証的に検討した。その結果、帰国中学生に対する質問紙調査により、帰国後の在籍クラスに対する意識として「友達との関係」「日本語運用能力」「楽しさ・居心地のよさ」「積極的な参加」「自由な自己表現」「在外経験の肯定的活用」「先生・友達からの是認」の7因子を抽出した。このうち「在外経験の肯定的活用」はいずれの受入れ形態においても得点が低く、他のクラス意識との関連も低いことから、帰国中学生はクラスで在外経験を活かすことに大きな関心がないことが示唆された。第7章では帰国高校生を対象に、彼らが異文化体験を通して得たと認識する特性を検討した結果、「国際人としての態度」「外国語力」「対人関係力」「国際的知識・経験」「自己表現力」「日本人としての自覚」の6因子を見出した。さらに、これらの特性因子に対し特に帰国後の在籍高校や家庭によるサポートの度合いが、強く影響することを示した。第8章では、帰国高校生が異文化経験をを通して得た特性を活用することに対して「キャリア・社会貢献型」「学校貢献型」「融合型」「不活用型」「特権利用型」の5因子の意識構造が抽出された。また、帰国生受入れ目的校の在籍者のほうが高い活用意識をもつこと等を明らかにした。第9章では、帰国高校生の将来のキャリアに対する意識として「国際キャリア志向」「国内キャリア志向」「国内外不問」の3因子構造が示され、「キャリア・社会貢献型」の活用意識をもつ者は、国際・国内にかかわらず高いキャリア志向を持つこと等が明らかにされた。第10章では本研究で得られた知見を整理し、中学段階よりも高校段階の帰国生の方が異文化体験を活かしやすい状況にあること、帰国生を家庭や在籍校を含むコミュニティ全体でサポートすることで帰国生の特性に対する認識や活用意識が高められることなどについて、理論に基づいて総合的な考察を行った。本研究の意義は帰国生の異文化体験を活用が日本の学校教育および社会全体を「多文化共生」へと変革する可能性を含んでいることを再認識したことであり、外国人児童生徒の教育に発展的につながる意義のあるものと認められる。</p>
審査委員	(主査) 教授 加賀美 常美代	
	教授 森 山 新	
	教授 大 森 美 香	
	准教授 浜 野 隆	
	助教 西 川 朋 美	